

## 「祈りの約束」

2020年10月31日（土）香港を覚えるの祈祷会・奨励

松谷暉介（金城学院大学宗教主事・日本基督教団牧師）

まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださるのですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。（ローマの信徒への手紙1章8-15節）

今日、私たちはオンラインの形でではありますが、香港の自由のため、そこに生きる教会、信仰の仲間を覚えて共に祈るために集っています。それぞれに背景を異にする方々、場所も全国各地に散らされている方々、香港に行ったことのある方もそうでない方も、共に祈る場に集えたことは、何よりも神の導きであることを、感謝をもって覚えます。

私自身、その香港の神学校に2013年から2016年まで3年間、滞在していました。イギリス植民地時代という歴史的背景があり、そして中国に変換された後も「一国二制度」が実施されていた香港は、中国大陸とは全く違う「自由な都市」であることを肌で感じることができました。もともとは中国大陸のキリスト教研究のための在外研究でしたが、香港の神学校の教師・神学生、地元の教会の方々との交わりを通して、信仰的に生き生きとして活気にあふれる香港独自のキリスト教に触れることができ、私はとても励まされ教えられることが多くありました。

このように、香港には多くの友人・知人、信仰の友がおりますので、昨年来、香港のニュースから目を離すことができないでいました。巨大なこの世の力が、自由を保障していた「一国二制度」をなし崩しにし、思想・言論の自由・集会の自由・報道の自由を奪っていく、そしてそれはやがて「信教の自由」にも影響が及ぶかもしれません。逮捕者が出たり負傷者が出たりというニュースを聞けば、自分の知っている人ではなかろうかと心配になります。抗議デモに対して警察が催涙弾のみならず、ゴム弾、実弾まで使用していた映像を見ながら、あの自由の街が、友人たちと共に学び、共に交わり、そして信仰の仲間たちと共に祈り・讃美し、礼拝をしていたあの街が大きく変わっていくのを、見ていられませんでした。FacebookなどのSNSに次から次に舞い込んでくるさまざまなニュースに、眩暈を覚えるような感覚になり、私も心身が不安定になる時もありました。

そのような中で、今年6月末に香港国家安全維持法が可決されてしまったというのは、本当に衝撃でした。これは、香港の自由を押し殺す決定打とも言える大きな事柄です。香港の人たち、特に教会が、キリスト者たちがこれからどうなっていくのだろうかということが気が気でありません。本当は、すぐにでも飛んで行って、直接友人たちに会いに行きたいと思いましたが、しかし、コロ

ナのこともあり物理的に不可能でした。また国家安全維持法は何が罪に問われるのか基準があいまいなものですので、私自身も気を付けなければなりませんし、また香港の友人たちにも迷惑が及ばないようにも気を付けなければならなくなりました。ですので、万が一のことを考え、しばらくは、香港の友人たちとのメールや SNS でのやり取りを極力控え、また連絡を取る場合でも、言葉や内容に気を遣うようになりました。

こうした状況に対して、私はどうしたらよいか分からないでいました。この世の大きな力に対して、なすすべがない、無力感を感じました。日本にいながらしてそうなのですから、香港に実際に身を置いている人たちの無力感や絶望感はもっと大きく、深刻なものでしょう。そのような時に、7月半ば、キリスト者学生会 (KGK) の方から連絡があり、オンラインで香港を覚えての祈祷会をするので、香港の状況について話してほしいという依頼を受けました。KGKの主事・学生約60名ほどがオンラインで集う祈りの会で、私自身が本当に慰められ、励まされ、勇気づけられました。その時に、「そうだ、祈ることができる。祈ることこそが、無力感や絶望や恐れに埋没しないための、むしろなお希望をもって歩むための大切なことだと思いました。今は彼の地に行けなくとも、大きなことは何もできなくとも、日本にいながら香港のために祈ることが、私にもできる、いや私たち、日本の教会・キリスト者たちにできることではないかと思いました。そして、十数人の超教派の牧師の方々と共に、夏以来、この祈祷会を開催することを少しずつ準備をしてきた次第です。

今日はこの奨励の場で、具体的に何を話すべきかととても悩みました。香港情勢や教会をめぐる状況は、予め作成しお届けしておりました動画をご覧いただければと思いますので、ここでは私が香港で経験をした、ある一つの出来事をお話ししたいと思います。

私が研究員としておりました崇基学院神学院には、香港の地元出身の神学生を中心に、中国大陸また東南アジアの神学生、フルタイムとパートタイムの学生合わせて200人以上在籍をしていました。週に一度木曜日夜、今私のヴァーチャル背景にもなっている神学校のチャペルで全体礼拝があるのですが、私は帰国を一か月後に控えていた2016年3月末、洗足木曜日礼拝で説教をすることになりました。それは同時に聖餐制定記念礼拝でもありましたので、聖餐の司式もいたしました。香港の地元の学生が大半ですので、たどたどしいものではありませんでしたが、香港に行ってから学んだ地元の言葉である広東語で説教をし、また中国大陸出身や台湾出身の神学生もいましたので、聖餐式の司式は北京語でいたしました。東南アジアのミャンマーやインドネシアの神学生は、イヤホンで英語通訳を通して共に礼拝を守りました。



こうした多言語・多民族の礼拝で説教をし、聖餐の司式をするのは、私にとって初めての新しい経験でした。また、香港での三年間、私が出会った香港や中国大陸、また東南アジアの方々にとって、私が初めて知り合った日本人のクリスチャンという状況でした。中には一部日本人クリスチャン友人がいるという人もいましたが、しかし、日本の牧師の説教を聞き、日本の牧師の司式で聖餐に与るとするのはそこに集った人たちにとっても初めての新しい経験でした。

私はその日の奨励で、香港の教会は私にとって「ナルニア国」のような存在だという話をしました。それは、「洋服ダンスの扉」を開ければすぐそこにあるはずの近い世界なのに、自分は今までその存在を知らずにいたという例えです。日本と香港の間は、物理的には飛行機に乗って3、4時間、格安航空券であれば片道1、2万円で行くことができるほどの近い距離、経済・文化交流は盛んだけれども、教会の関係となると、日本の教会にとって香港教会は近いようで遠い存在であると私は感じていました。みなさんにとっても、もしかするとそうかもしれません。

しかし、私は香港というナルニア国に実際に足を踏み入れて、邪悪な雪の嬢王の支配・恐怖・絶望に覆われそうになる世界にあって、真の王アスラン、キリストと共に、「神の国」のために信仰の戦いをしているキリストの兵士たちである香港のキリスト者の皆さん、また中国大陸や台湾、東南アジアのキリスト者に出会うことができ、とても信仰的に励まされ、勇気づけられた。

私は神学校の礼拝のその説教の中で、さらに「皆さんにとっても、日本の教会はナルニア国のようなどころではないでしょうか」ということも問いかけました。今はコロナで観光客が途絶えてしまいましたが、その頃は多くの香港人が日本に旅行に来ていました。香港の教会の友人の中にも日本に旅行に行く人たちが多くいましたが、残念ながら日本の教会に関心をもって足を運ぶ人は、全くと言ってよいほどいませんでした。私は「日本にもキリストの教会があるのです。真の王アスランのために、キリストのために戦う信仰の仲間がいるのです」と、彼らに語りかけました。

そして「私たちは確かに、お互いが近くて遠いナルニア国のようにだけれど、実は私たちは本当は、聖なる公同の一つのナルニア国、神の国に生きているのだ」と語り、そして共に聖餐に与りました。私にとって、一生忘れることのできない出来事となりました。言葉の違いを越えて、民族の違いを超えて、そして歴史の負の遺産をも超えて、共に真の王なるキリストの前にへりくだり、キリストの体であるパンに与り、キリストの血潮である杯に与りました。礼拝の後、私のもとに駆け寄り、目に涙を浮かべながら私の手をしっかりと握りしめてくれる人もいました。また、何人かの友人が、夜中にメールなどで、「アスランのために。ナルニア国のために」とメッセージを送ってきてくれました。

私は日本を離れた海の向こうの香港の教会での経験したこうした出来事を通して、パウロが何故、まだ行ったことのない遠く離れたローマの教会のために熱心に祈り、あれほどまでにローマの教会を訪ねたいと願っていたのかが、ようやく分かるようになりました。

**「わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。あなたがたに是非会いたいのは、霊の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。(というより) あなたがたのところ、あなたがたと私が互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」**

教会・キリスト者同士が交わりを持つのは、「互いに持っている信仰によって、励まし合うため」なのです。私は香港で出会った香港教会の方々、中国大陸や台湾、東南アジアの教会の方々も含めて、多くの海外のキリスト者との出会いを通して、信仰の励ましを受けてきました。共に交わりを深め、祈りと讃美を合わせ、共に礼拝を守ることを通して、お互いに霊の賜物を分かち合う経験をすることができました。それが、今でも私が日本において、教会であれキリスト教学校であれ、宣教の業に励む上での、大きな信仰的原動力になっています。

パウロはまだローマの教会に行ったことがありませんでしたが、コリントやエフェソ、アンテオキア、エルサレムなど各地の教会との関わりを通して、「キリストの体なる教会」を形作るためにも、そして各人の信仰が豊かに成長するためにも、教会同士が、またキリスト者同士が交わりをもち、互いに祈り合い、励まし合うことが決定的に重要であり、欠かすことができないと考えていました。だからこそ、パウロは異邦人教会とエルサレム教会が祈りにおいて結び合わされるように、危険を顧みず、異邦人教会からの献金をエルサレム教会にまで届けようとしていました。だからこそ、遠く離れた、まだ行ったことのないローマの教会をもいつも思い起こし、そのために絶えず祈っていたのです。その強い祈りの思いは、手紙の中で「行ける機会があるように」、「あなたがたに是非会いたい」「何度もそちらに行こうとしていた」という言葉に、よく表れています。

私自身は既に香港に行った経験がありますので、その意味ではローマの信徒の手紙が執筆された当時の、まだお互いに出会っていない時のパウロとローマの教会の関係とは少し違いますが、しか

し、「互いに持っている信仰によって、励まし合いたい」という思いは、今でも同じです。ですから、帰国後も、年に一度は休暇を使ったりし香港を訪ねたり、またあちらからの訪問団やミッションチームを年に2、3度、自分の牧する教会で受け入れてきました。

しかし、今年コロナによって、それが妨げられてしまいました。そしてたとえコロナが収束しても国家安全維持法の影響で、今後は日本と香港の間を、今までのように気軽に安心をして往來することが難しくなるのではないかという恐れがあります。本当は、これからは、まだ香港に行ったことのない日本の教会の牧師の仲間たち、信徒の方々、青年たちを連れて香港の教会を訪れ、「互いに持っている信仰によって励まし合える」ような旅行企画を立てたいと願っていましたが、それも当面はできそうにありません。パウロがローマの教会の人たちに向かって、「兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです」と書いていますが、これは今の私たちの状況と同じであり、しばらくの間は妨げられた状況が続くかもしれません。

今回、この香港を覚えての祈禱会の奨励の準備のために、四年前の香港の神学校での聖餐礼拝の説教原稿を改めて読み直し、自分自身が最後にこのように語っていたことを思い出しました。

「私は日本に帰ってしまえば、今晚と同じようにしては皆さんと共に礼拝をすることはできなくなってしまいます。しかし私はこれからも日本で礼拝をまもり、賛美を歌い、聖餐に与り、祈りをするたびに思い起こすことでしょう、この香港にもその他のアジア各地・世界各地に共に祈っている友がいること、キリストの兵士たちがいることを。私は日本に帰った後も、皆さんのために祈り続けます。ですから皆さんもまた、それぞれに派遣されていく場で祈る時に、どうか私のことを思い起こしてください。日本の兄弟姉妹のことを思い起こしてください。どうか日本の教会のために祈ってください。」

私は自分でこの言葉を読み返しなが、私は日本に戻った後も香港の信仰の友のために祈り続けることを約束していたことを、改めて思い出しました。また、別の地元の教会で説教をする時には、「日本のために、日本の教会のために祈ってください。私も日本に戻ったら祈り続けますし、日本の他の教会の人たちにも、香港のため、香港の教会のために祈るように呼びかけていきます」といつも話していたことを思い出しました。「香港のために、香港の教会のために、香港の信仰の友のために祈る」、私はその約束を、今果たしたいのです。一人で祈り続けることは困難ですら、一緒に香港のために祈る祈りの仲間が、祈りの群れが必要です。

この祈りの会の準備会・呼びかけ人になっていただく十数名の方々には、だいぶ無理を言ってこの会のための時間を割いていただきました。また、今日この祈りの会に集われている皆様も、それぞれに忙しい中であって時間をとってくださっていることと思います。特に牧師の方々にとっては、日曜日の前の土曜日は静かな一人の時間が欲しい時だったかもしれません。それでも、今日

こうして70名以上の方々が共に祈るために集ってくださいました。

今日は私たちプロテスタント教会にとって大切な、宗教改革記念日です。宗教改革を記念する時、それはいわば「教会が教会となるべき」ことを再確認する時であり、「御言葉によって絶えず改革され続ける教会」として、ヴィジョンをいつも新たに抱く時です。私たちの教会も、また一人一人の信仰も絶えず新しく変えられていく必要があります。しかし、今日、皆様と共にこの祈禱会の中で共有をしたいのは、何か大きく制度や教理や信仰の形を新しく改革しようなどというものではありません。ただ、ナルニア国につながっている心の中の「洋服ダンスの扉」を開けて、私たちの祈りの扉を開けて、近くて遠かった香港を近しく覚え、香港のために新たに祈り始めることです。

私は今日の祈禱会のための準備をしていく中で、一つの夢・幻が与えられました。それは、この崇基学院神学院の礼拝堂で、あるいは他の香港の教会で、もう一度香港の兄弟姉妹と共に礼拝を捧げることです。彼らと共に祈りをささげ、共に賛美を歌い、共に聖餐に与ることです。しかし私一人ではありません。是非、皆さんと一緒にそこに行きたいのです。日本の教会の皆さんと一緒に香港に行き、香港の教会の方々と、「互いに持っている信仰によって、励まし合い」たいです。今は、コロナでそのことが妨げられてできません。しかし、コロナが終わった後、国家安全維持法のことには十分に気を付ける必要がありますが、それでも工夫をすれば香港の教会・神学校を訪問する方法はあるでしょう。

そしてその時には、顔と顔を合わせながら、香港の信仰の仲間たちにこう伝えたいのです。私は、いや、私たちは皆さんのために、ずっと祈っていました、と。これからも、ずっと祈り合いましょ、共に神の御国のために、キリストの福音のために、祈りを武器として共に戦って生きましょと。

私たちはこの世の国家的・社会的な課題と向き合う時、何かの声明を出したり、デモ活動をおこなったりすることもあるかもしれませんが、私たちキリスト者にしかできないことを、私は香港のキリスト者の方々と共にしたいのです。それは祈りであり、また礼拝です。香港でも日本でも、また世界の各地、どこでも国家は人々に国の歌を歌わせようとし、国の旗を崇めさせ、個人崇拜や富国強兵のための祈願・参拝をさせようとし、神の国の賛美歌を共に歌い、十字架の御旗をこそ仰ぎ見、ただイエス・キリストのみを真の王として崇め、神の国・福音のためにこそ共に祈りを合わせていくのです。この世の力が、私たちを絶望や恐怖や諦めに陥れ、さまざまな自由を奪っていかうとするとき、私たちの祈る自由は決して奪われることはありません。むしろ、この祈りこそが、良心の自由・信仰の自由を守り、思想・言論の自由をも守ることにつながっていきます。私たちのこうした祈りの会は、そうした信仰の戦いの一つです。

いつか香港に行けるようになった時に、香港の信仰の戦友たちと一緒に歌いたい讃美歌があります。歌詞を画面共有いたします。この賛美は、世界的にもよく知られている讃美歌ですが、2017年11月に、崇基学院神学院の神学校日において神学生たちによっても歌われました。その時点では、今ほど香港の情勢は緊迫して



いませんでしたが、既にそうした兆候が少しずつ見られるようになってきていた時期でもあります。讃美歌の合唱には、香港出身の神学生だけでなく、中国大陸出身の神学生も何名か加わっていました。今も、この賛美を歌いながら信仰の戦いをしている兄弟姉妹が香港をはじめ東アジアの各地にいます。今日は皆さんと同じ場所で一緒に歌うことができないのはとても残念ですが、それでも最後に、この歌詞に込められている祈りを共に覚えながら、それぞれの場で賛美をしたいと思えます。

#### <讃美歌>

1 善き力に我かこまれ、守り慰められて、世の悩み 共に分かち、新しい日を望もう。

※善き力に守られつつ、来たるべき時を待とう。夜も朝もいつも神は 我らと共にいます。

2 過ぎた日々の悩み重く なお、のしかかる時も、騒ぎ立つ心しずめ、 御旨に従いゆく。 ※

3 たとい主から差し出される杯は苦くても、恐れず、感謝をこめて、愛する手から受けよう。 ※

4 輝かせよ、主のともし火、我らの闇の中に。望みを主の手に委ね、来たるべき朝を待とう。 ※

#### <祈り>

命と希望の源である主よ、悩みの時、苦しみの時、暗闇の時こそ、どうか私たちがあなたに祈ることができますように。しかし、一人で祈るのではなく、信仰の仲間たちと共に祈ることができますように。どうか、香港の地にある、教会を兄弟姉妹を、あなたの善き力によってお守りください。どうか香港の信仰の友たちが、希望の火を輝かし続けることができるように、お導きください。いつの日か、私たちが顔と顔を合わせ、共に祈ることができますように、そのような来るべき祈りの朝を待ち望ませてください。

世の光なる主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン